

第二十七號

文明之母第二十七號目次

本誌は每月二回三日十八日ユ發行す
本誌は前金ユ非されは發送せず
本誌の定價は一册金六錢十二册半年分金六十八錢廿四册一年分金一圓卅錢
全國無遞送料
本誌の廣告料は「五號活字二十三字詰」當り左の如し

	（壹回）	（二回以上）
壹行	金八錢	金七錢
三十行以上	金七錢	金六錢
六十行以上	金六錢	金五錢

本誌の見本は郵券六錢を送らるれは呈す
本誌代金御回送の節は內國通運早遠便又は東京郵便局へ御振込被下度
郵券代用は一割增
本誌の前金將ユ相切れんとする時は其卷の宿所姓名を朱書して發送すべし

版權所有

主筆　大矢森之助
發行兼編輯人　中村一　東京深川區諸町十三番地
印刷人　小西石造　東京深川區仲町八番地

發行所　東京日本橋區大傳馬町二丁目貳拾貳番地　生文社

文明之母第二十七號



明治二十三年六月十八日發兌

○結婚論（承前）

中川重麗譯

抑も道徳的の尊厳と精神的の獨立とは、之れを要するに夫婦を新たに尊貴にし、更らに高尚にする爲めにこそ必要なれ、夫婦の組織を無益とするが爲めに必用なるにはあらず。是れを以て少女が所天となすべき人を撰擇するは、實に大切なる瞬間にて、女子生涯の幸福不幸福の岐なり。されば夙に胸中に智識の明を養ひ、我が精神的の性質には、如何なる人物を意中に置て、恰好の伉儷なるを得るやを知悉せざるべからず。而して此の明を養ふは、少女をして成るべくば交際社會に入らしむるの晩きに如かず。成るべくは小兒的の故態を久しく守らしむるに如かず。我々は早熟の小才ある女子を欲せず、確乎たる自覺ありて忘想の奴隷とならず、眞實に愛を解するの少女を欲するな

り。眞實に愛を解するの少女にして、始て眞の愛を語るべく、彼れ愛すべきの人を愛して、猥に愛を算することなかるべし。

男子の多くは蓋し彼の妙齡早熟の女子を認めて、韻雅の致ある詩人的とするならん、可憐的と賞するならん。何となれば此の種の少女は、自己の中心に感情を御するの力なきより、其誰なるを問はず、男子の來り慇懃を通ずるものあれば、直に其腕に扶けられて連理を約し、偕老を契れはなり。是れ他なし、男子なくては、我れは世に生存し能はずと信ト、其男子が自己の意中に畫ける男子と、相符合せるや否や、よ曾て向ひ及ばざればなり。豈に笑ふべきの至りならずや。此の如き本性的なる羸弱的なる女詩人は、我か現實世界の散文を滿足せしめ能はざるなり。若し女子の觀念は現世の天惠を求むるに在りとせば、我等は此の觀念を更に一層高等なる眞智眞識の中に求めざるべからず。」

此の如き曖昧糢糊たる戀慕は常に唯影を追ひ影を捕へ、其捕へたるものゝ中心が虚空なるを知るときは、忽ち不平を訴へ、此の磁器の偶像を破壞し去り、更に手を伸べて復た他に求めんとす。若し夫れ此の如き尫弱なる心緒が、一旦苦惱よ飽くや、播然として來る者は、彼の解脫自由の觀念なり。是よ於て男子は忽ち輕蔑せられ、恥辱を與へらるゝと雖も、然れども亦忽ち愛着せられ、崇拜せらる。何ぞ變幻常なきの甚しきや。爲人此

二

の如きの女子は、戀慕愛情及び詩的の運命の爲めに、終に粗暴なる自己主義に陷り、而して毫も自から知らざるなり。此種の愛、即ち我物を意の如くに取替へんとするの自由を望むの愛は、斯く云ふなり「妾は妙齡なりし日には實に此の男を愛したり、然れども妾は自から迷へり、彼の男こそ妾を能く識るものならめ、故に妾は彼の男に寄らんとす」と。

此の如きの愛は眞に夫婦を厭ふものなり。夫婦を不便利と思ふものなり。然るに之れを認めて正當となすものありて、此の迷想を助長するは長大息の至りなり。夫婦が既に戀慕を以て相親しまざるとき、自然に德義を紊すべしと主張するものあり。是れ誠に眞理なり。然れども其道德を紊すの心は、先づ隨意に戀慕の情を變ずるより起るものなれば、此の眞理は彼の眞理よりも更に大なる眞理なり。されば卿等良人を撰むには、其相結ばざる以前に於て、反復丁寧之れを試むるに如くはなし。而して一旦相結びし以上には、復た他を思ふ可からず、唯克己を學び、有別の敎を肝銘すべし。是れ即ち眞理の最も德義に合へるものと謂ふべし。

縱ひ人皆結婚に注意を深くし、淸潔なる愛情を以てするとも、双方相誤り相欺かるゝことなしとせず、從て世に不幸なる夫婦の絕無に至ることなかるべしと云ふものあり。是れ人類組織上の不完全より來るの弊害なれば、別の問題たり。人々相欺かるゝこと

三

は獨り夫婦の間に止まらざるべし。されば此の欠點あればとて、他に數多の利益ある夫婦有別の制を破壊せんとするは、其本末を誤るものといはざるを得ず。

女子が全力を盡し、心に涵養すべきは女性的尊嚴の感覺にして。是れ女子生涯の各境遇に最も安全なる支柱を與ふるものなり。然れども悲しい哉、女性の胸中には高慢と混同するもの多し。尊嚴の大陽は少女の無邪無心なる處女的可憐れ白を照して爛々たらしめ、却て其温容を失ひ、詩的の優美を傷くと云はゞ、是れ尊嚴と高慢を誤れるものなり。妾は復た何をか謂はん。

其他事を純乎たる實地的より觀察すれば、夫婦が女子に戸外に與ふる利益の傍には、一定の箝束あるを知るを要す。既に飛翔を好める女性の精神は、其樊籠にて双翼を傷け美なる才能も其爲めよ死するもの多し。されば少女には夙に教訓して、其境界れ狹隘なることを悟了せしむることを甚だ必要たり。結婚せる女子には固より此の義務あり。是れ結婚の利益に伴ふ者なれば、固より彼の義務を辭して、此の利益のみ亨くるの權利なきなり。唯結婚せざる、處女生活の女子は、此の義務の箝束を免れ得べし。故よ女子にして若し結婚し、此の直接最近の義務よ服するを厭はゞ、處女獨立の生活を爲すあるのみ。然れども世の女子の皆此に思ひ到らざるは是非なきなり。

男子は國法に命ぜられて其家眷を保護せざる可からず。女子には此の如き法律なし、然れども道德上の義務ありて、男子が務むる所の事を家に於て之を勤め、忠實に義務に服せざる可からず。其務至て大なり。如何に賦質の高才あるも、藝能あるも、仙姝神女の觀あるも、此の簡單なる義務は免れ難し。若し此義務を免れんとせば、是れ自己が幸福を與へ、安寧を與へて、家眷を保護すべきを忘れ、却て自ら其家眷の食客となり、一事なすなくして、自己の幸福と自由を貪らんとするものなり。されば自覺ありて造次にも忘却せず、此の義務を充たし、以て最高の平和を見出し得るの女子にあらざれば、此の神聖なる夫婦を濫用するの恐れあり。此の如きの女子は家族に對し、社會に對し、一大罪人たるの名を負はざるべからず。

又女子が豫望の如く、夫婦の間に我と幸福とを見出し得ざればとて、自己の本務を等閑に附し、以て其賠償を收め、自から慰するの權利あるなし。現に國家も社會も、男子が幸福多き結婚をなしたる歟、或は不幸少からざる妻女を得たる歟、毫も其如何を問はずと雖も、男子は男子たるの義務を盡さざる可からず。女子に於ても亦之と相同しく、良夫を得ざりしとて、其本分を怠る可からず。人類の生存は猶ほ義務の爲め、職分の爲めに設けたる祭壇の如し。其職分を盡さず、其義務を果さざるは、此れ神聖なる祭壇を汚

すものにもて、人世生活の中、不敬之れより大なるはなかるべし。蓋し女子の社會には軟弱なる醜陋なる爲人少なからず。斯る爲人の女子多きが爲、撰擇を誤り、佳遇を失し、我れ卿を卿とせず、彼れ吾歡を以て視ず、空しく琴瑟の歡情を羨み、徒らに反目の不和を悲しむ等、滑稽的の演劇は、長く生活と小説との中に絶へざるなり。佳遇を得ざるの悲は、實に女性の生活の最も悲慘なるものなり。然りと雖とも此の不幸や、未た以て女性をして死なしむるものと謂ふ可からず。何となれば愛は吾人本體の地盤なり、吾人をして偉ならしめ、華ならしむるの根本なりと雖も、愛は其範圍至て大なり。唯獨り一夫に對し、區々たる夫妻の關係に於てのみ存するにあらざればなり。されば眞の愛を解せるものは、夫妻の間に愛れ幸福を得ざるも、敢て深く憂へざるなり。徳の孤ならざるが如く、愛あるの心は隣ありて、決して孤獨とならざるなり。女子は其心臟を人間社會の胸中に置き、人間社會の爲めに之れを搏動せしむべし。女子は天女の如き羽翼あり、區々の小事に繋がれず、高く飛翔して人世の爲めに、一層高尚なる愛の如何を講究すること肝要なれ。

中等社會には強迫を以て少女を結婚せしむること稀れなり。然れども外部の切迫よりして、強て少女を結婚せしめ、此の結婚に因りて無事の保庇を見出し、生活の地歩を

占めんと欲するものあり。看よ理想なき世の數多の母と、數多の伯母は少女を諭して曰く、兒が爲に計るに結婚より他に幸福を與ふるものなしと。而して百方術を盡して彼れを婚姻の道よ導かんとす。嗚呼、少女の爲め世界に理想ある母の輩出せんことを妾等の熱望する所なり。

少女をして此の强迫手段に對し、宣戰せしむるの術は、唯少女に敎育を以て自立の力を與ふるに在り。一事一藝をも學び得ざるに於ては、種々の不自由あれば、人と結婚して其生活の地を得ざる可からず。從て其價を問はず、男子を求むるの必要あり。彼れ實に男子を有せざれば、我が身は無何有に均しく、零數に等しきなり。此の如き女子の爲めに、世の結婚をして俗了せしめ、其高尙の意味を失はしむるなり。高尙なる女性が、爲めに憤激するも復た理なきにあらず。女子の無伎倆は女子を下して奴隷たらしめ、女子を强迫して夫婦の獄に繫がんとす。此の如き夫婦は高尙なる愛情を以て相愛するにあらず、尊敬の感覺を以て相敬するにあらず、唯是れ未來の活路と掛念し、餌食の爲めに寄れるのみ。

抑も男子が女子を敬せず之れを輕蔑する所以のものは、一に女子に此の弱點の有るに在り。若し女子にして此の如く我れに近づく人あれば、其誰たるを問はず、甘んじて

掠奪し去らるゝに於ては、女子は則ち女主宰にあらず、女棟梁にあらず、男子の爲めに玩弄せらるゝ彩毬たるのみ。若し此の如くんば、「凡生活の最高惠は、貴女の惠なるべし」と云へる彼の美なる信仰は今何處にありや。又男子の高德なり正義なり潔白なり尊嚴なりとする者は唯一に眞正なる女性の愛を獲て之れを幸福ならしむるに在り」と云ふにあらずや。然るに今の世の男子の凡俗なる此の如く卑陋なる此の如く不正なる不潔なる又此の如くにして、敢て手を伸べ我等女類の最美なるもの最愛なるものに觸れんとし、又女子も敢て恠しまず、敢て擯けず、却て手を伸べ相迎ふるは抑も亦奇怪ならずや。妾等は益〻世界に有力なる、自覺ある女子を得んと欲するに急なり。他なし、是れ女子の尊嚴を思ひ、女子の眞價を思ふ熱心より、新氣を呵して世界に徹底せしめ、女子を貴化せんと欲する故なり。男子も亦宜しく妻を娶る以前に、自から其德を省み、其思想を省み、又其中心の眞率と、人品の矜誇如何を顧み、眞女子に對して愧づることなきの覺悟なかる可からず。詩仙い謂はずや、

故に卿等は惡人に、卑怯人に、又虛言者なる奴隷に身を寄するを休めよ、然るときは自ら勝を制して權利を得べし。

と此の一言蓋し銘して忘る可からず。

スタチスチック雜誌第四十九號に於ける相原撤氏の公生兒の調査を見るに（明治二十年）公生兒、一〇六一九七五、私生兒、五七〇二七。乃ち之を人口（三九〇六九〇〇〇）に比較すれば人員千につき、私生兒一●四六、公生兒一八●六二の割合なり。



○父母のため　　　咽烟山人

小兒、殊に四五才頃の小兒は實に破壞の王です。而して又其の保母、父母たる者が、譯もなき徒事として叱り止むるも此の破壞の仕業に在ります。然し此の破壞の所爲は、最も喜ぶべき事です、破壞する程の氣性なき小兒は成人の後も、破壞ずきの小兒より遥に劣等の人物です。夫を父母、保母が猥に叱り懲すは却て間違ッた話で、小兒の智惠の發達を妨け、大事の愛子を愚物に育てると云ふものです。

ベルトホルド、アウエルバッハ氏は此の事に就き左の如く述べました。父母たる者は宜く注意すべきとです。

破壞すると云ふことは小兒の最も好める所爲の一です。先づ父たる者が外に在りて商賣を營むとして、若し生憎に賣品の一個も賣らず、何事も爲さずして、不愉快を感じ

吾家に歸る途すがらも、此不快の感情を無邪氣なる愛子の笑顔にて償はんと思ひ「愛子の氣に入りさうな種々の翫弄品を購ひ來りて、「ソレおみやだ」と投げ與へて愛子の喜び顏を見るを樂みとしましよう。是が普通の人情です。投げ與へられた小兒はそれを見ると大喜に喜びます、まづ親父の不愉快の感情は是れで消滅します。然し此の喜悦は長くは續きません、小兒は暫くすると、遠慮はないです、折角のおみやを破碎しはじめ、樣々な手細工を初めます。甚しいのは一日を經ざるに、おみやのすべては片々細々に破碎し盡され痕をも止めません。之を目擊する父母は一時は立腹して惡らしいと云ふ感情を起します。

又暑の烈しい時分、父なる人が愛子の手を引いて、納涼がてら散歩に出かけます。すると小供は愛らしい視線を青々として見るさへ涼し氣な樹林に注ぎて、其枝を折ッて玉はれとせばみます。此時に露滴る計りの青枝を折りて與へ、目をとめて御覧なさい、彼は青枝でも何でも會釋は無いです、楓の樣な優しい手よて青葉の一枚々々をもぎ取り初め、終には一本の裸枝となし、今度は騎兵が馬に鞭うつ見えで、勇しく振り動して樂しみます。が、又暫くすると彼は其枝の外皮を剝き始めまそ。手の働作は中々止みません。曲げる、上部を折る、下部を折る、嚙む、終には地上よ投げ捨てゝ顧みもしません。

如何に美しき青葉の枝も彼が常住の部屋の片隅よさへ投げ捨てられてあるは希なことです。此の様に小兒の破壞的の擧動と目撃する父母は愛憎もこそも盡き果てゝ以後は何物も與へまじと决心するも有りましやう。或は既に與へたる物までも取り上げて、小兒の既得權を犯す者もありましやう。これ一應無理ならぬことです。

總て吾人々人間の根原所爲は左の件々にある者であります。

一　ある物を創造する事。

一　發明する事。

一　改造する事。

元來吾人々人類は世界に於ける事々物々を以て、漫然忽諸に附するのみでなく、何事か發明、創造しやうと考へるものです。此の熱情は微細なる事物より漸を追ふて大なる事に及ぼして顯示れるです。農事よ於て、商工業に於て、美術品を創造するとに於て、而して又吾人の生息の發達、國家の發達に於て、吾人か以前腦中よ企望として、理想として保有したるものを實地に行ひ、而て其物が吾人の眼前に顯はるゝに至れは、今度は吾人は己れの周邊に如何なるものがなされてあるやを究知せんとの欲望を起します。此成行したる事物の中にて、吾人は以前理想に描きたるものを歴然として看るとを得る、

即ち吾人が實行せる理想は外界に顯はれ來ッたのです、此理を推し來れは、吾人は木材より一個の椅子を造り、一個の石より彫刻物を造り、吾人の明かなる思想より公共の組織、或は政府の組織と創造し得らるゝです。

人間か其力を顯はし、或は其思想を印刻すべき行爲の源因―快樂なる者は既に小兒の時にわかります。小兒に翫弄品を與へて御覽なさい、小女あらば人形に衣物を着せたり、寢させたり、搖籃中に入れて之を搖動すことを以て滿足します。―既に其中に於て行爲の熱情を示して居ます。―男の子供は鞭を作り手綱をつけたる木馬を其厩より引き出して轆々たる車をひかせて喜んで居ます。或は全くかゝる翫弄品を破碎し盡します。左れど父母たる者は、是等破壞の擧動を見るとも決して叱り懲しては惡いです。彼等は其物を破壞せんとするにはあらで、却て其ものを碎きて、それより一個の新き物の躰を創造する積なので實は一種の高尙なる末頼母敷行爲であるのです。而て此行爲は子供心の無經驗から起るので、惡心や、破壞の嗜好心よりは遙よ遠かッて居るのです。故に吾人は云ふ、惡魔心は子供の生れ出でたる時より子供を支配するものでない、又素より之が爲よ小腕を以て存在物を破碎する者でない、却て其情は、ある物と造り或は成さんとする自然的正義の熱情であると。

小兒の精心は常に一の神聖体として觀察せねばならん、吾人は小兒の行爲の中より、惡心なき神聖なる根原感情を發見します。小兒の破壞的擧動、いたづらは只だ存在物と變形しやうと云ふ一時の感情に過ぎない、即ち不意の刺擊によりて、起因する知覺なき、思考力——喜悅の誠實の基礎と云ふ者です。素より惡を思ふのでない、何故なれば人間の心性は素善にして尙きものです、惡と云ふのは善力の一の迷霧にて、人間に誠實なる理想が欠乏するより惡道に導かるゝものです。故に吾人は云ふ小兒の心性を一れ神聖体として觀察すれば、小兒の行爲より惡る氣なき、神聖なる、根原感情を發見するものなりと。

（未完）



○大磯長者林　有栖川宮殿下御詠

れはいその、松のはやしに、來て見れば、ちとせのよはひ、のぶこゝ地せり。

十三

○植木の驛にそのかみをしのぶ

文學博士　小中村清矩

あきのしもうゑきもたわに、ふりしきし、ひかりは世によさやけかるらし。

○待郭公

畠山健

ほとゝぎす、聞きつと人は、告げたれど、わがまち居ればなかずもある哉。

ほとゝぎす、こゑ待ちかねて、たちばなの花さくかげと、たちならしつゝ。

○室鳩巣翁大學三綱八目和歌

此ごろ脳の病にとりて書よむべくもあらず、さりとてふりつゞきたる雨に道さへあしければ、そゞろありきすべくもあらねば、ふるくかきすさみれきたる抄本どもみるともなしにくりかへせば、室鳩巣翁のよみれかれたる大學三綱八目の歌あり。翁の歌は世にしる人も稀なるを、題さへ此翁にはいとつけ〴〵しければ、ひろく人にもとて

不二の屋あるじ。

大學三綱八目和歌

西城侍讀室新助直清

明々德　みなひとの、ものゝこゝろは、ます鏡みがゝばなどか、くもりはつべき。

新民　ふりにける、ならの都の、ならはしも、あらたまりゆく、きみがみよかな。

至善　よしとみる、其一そぢを、難波江の、あしかるかたに、うつさずもがな。

格物　わがやどの、千くさの花に、とめてこそ、いろなき春の、いろもしらるれ。

色なき春は形なき理をいふなるべし。(自註)

しらくもの、幾重とみつゝ、こえこしは、たゞひとすぢの、山路なりけり。

これは一理貫通をいふなるべし。

致知　日を經つゝ、ふみゝるにこそ、たまはこの、道のおくをも、しら川のせき。

月花も、なれてみるにぞ、まさりける、さりとてかはる、いろかならねど。

致知は馴知のこゝろもあればかくよむなるべし。

誠意　わが心、ならはんものか、はゝきゞの、ありとはみえて、あらぬためしに。

意の誠ならぬは意のきざしの善をなさんとはみえながら、

それとさだかならぬをいふとあればかく詠するなるべし。

人しらぬ、こゝろにはぢよ、はぢてこそ、つひに恥なき、身ともなるべき。

これ愼獨の心なるべし、愼獨は誠意の法とあれば、ひとつに

通はせて詠じたるなり。

正心　三輪のやま、すぎたつ門を、たづねきて、すぐなる神の、こゝろをぞしる。

脩身　あさゆふに、たもつ我身は、からごろも、たちゐにうつせ、道のすがたを。

齊泉　いつまでも、ともに汲む井の、底清み、むすびぞかはす、もとのこゝろを。

秋風を、よそにこそきけ、窓のうちの、こと葉にれりて、うらしなければ。

治國　しるやいかに、民のかまどに、立つけふり、いくゆふぐれの、心づくしを。

平天下　春かぜの、ふくとはなしに、おのづから、のどかにみゆる、よもの海づら。

つれ〴〵のすさみに大學三綱領八條目を題として三十一字をつらね侍り。いにしへより釋教れうたはあまたのせたかれ侍りけれど、儒教のうたはみえ侍らず。近頃世によみ出ではべるもあれど、よくいひはせたりとみゆるは歌のさまかたくなゝり。うたのさまれかしとみゆるは、其こゝろたらず。元來和歌はわが國の風儀といへど、おのれ學ばぬみちなれば、六義のかたはしにも叶ひ侍るべきや、おぼつかなし。

室　直清

○里見八犬傳をはむる長歌　故　小津久足

筆の海、机のしまに、いざりする、人はれはけど、海幸は、得かてにすとふ、文の苑、詞のはやし、かりくらす、ひとはあれども、山幸は、いとりかぬとふ、しか

れども、わがせの君は、朝よひに、簑笠きつゝ、海幸も、その山さちも、ものさはに、とり得てあれば、みのかさに、かくれもあへず、世にひろく、名はあらはれて、人みなの、よろこぶ書を、家の名の、あらはしつくり、むねにみち、牛に汗する、まき〳〵は、世にはびこりて、こもまくら、たかき人たち、しつたまき、いやしき人も、みやびとも、をとめのとも、、たふな〳〵、めでよろこびぬ、いやひろく、よろこぶ中に、鳥がなく、あづまの國に、いにしへに、ありけることの、くすはしき、ことゝいひつて、かの見ゆる、里見の家を、まもりたる、八の犬とふ、氏人の、つたへをしるす、書はしも、世よぬけ出て、天の下、ゆすりとひもし、新しき、年のはじめに、うぐひすの、初音はあれど、梓弓、春にしなれば、さきいづる、花はあれども、つかの木の、いやつぎ〳〵よ、このふみの、いづるをまちぬ、かくばかり、たへなるふみの、石の上、ふるきむかしゆ、今までに、ありとはきかず、いまよりの、千年の後に、たれしかも、あらはしいでむ、文國と、名よおふ國に、いにしへゆ、其名聞にて、かず〳〵の、星のかたちを、れりあせる、そのからにしき、しきしまの、やまとの國よ、むかしへゆ、其名もたかく、五十まり、四筋の糸を、そめいでし、そのむらさきも、このふみよ、いかでかしかん、このふみに、わにま

さらめや、このふみを、めづる人らは、このふみの、名におふ犬の、家内を、まも 十八
るがごとく、よそには、出だしもやらず、家人の、なづるごとくに、かたはらを、
手ばなしもせず、あく時の、あらずといへば、鳥の跡、それにはあらぬ、犬の跡、
いやとほき世に、のこらざらめや。

反歌

からにしき、大和にしきを、おりまぜて、あやにおもしろく、つゞる書はも。

骨をかへ、かたちうばひて、から鳥を、くひふせし犬は、ゆゝしきそかも。

次號には篠齋野叟の「八犬傳跋文にかへてよめる長歌みじか歌」をかゝぐべし

野田千秋の棄兒を憐む歌、および雲井龍雄の棄兒の歌、共に能く悲慘の情を寫し得て餘蘊なしといふべし。又村上佛山の棄婦行のごときは一字一涙、讀み來り讀み去るの間、襟の沾ふを覺えざるなり。蓋し皆絶世の作といふも諛言にはあらじ。爲に內田遠湖氏の評語を得て之を揭ぐ。

○棄兒を憐む長歌并短歌

野田千秋

千早振、神の御代より、醜鬼の、ありとはきけど、うつしみの、今のをつゝに、見

きといふ、人もあらぬを、神無月、十日とすぎて、あかはしの、明るあしたよ、我家の、近きわたりに、しこ鬼の、ありときければ、梓弓、とりもあへず、まかこ矢を、いきてし見れば、醜鬼れ、行方もしらず、その鬼の、棄たる兒と、人皆の、いひさはげるれ、をのこ子の、顔もきよらに、初花の、よはへるがごと、降雪の輝くがごと、いつくしき、兒にぞありける、かくばかり、愛たきちごを、かしのみの、獨り棄置く、親の身れ、いづちいにけん、知る人も、無しときければ、悲しさに、名をもなのらせ、家をしも、きかまくもへど、ちゝのみの、父もればえず、はゝそはの、母も見しらず、吳羽とり、あやめもしらず、朝鳥の、泣になきけり、玉鉾の、道の邊なれば、人毎よ、いゆきもとほり、かしましく、立さわげとも、いかさまよ、せんすべしらず、黒髪の、思ひ乱れて、うへもなき、寳てふ子を、かくしこそ、棄てゝけらしも、さはいへど、鳥獸すら、子を思ふ、心ふかきと、人として、かゝるしわざは、人としも、れもひもあへず、人皆の、れにといひしは、此親の、心の鬼をいへるなりけり。

捨つるとは、人のなすべき、わざかこれ、をのこなりけり、かへす〲も。

內田遠湖云。古來咏棄兒者。源右府之作最顯。此篇略依其意。而鋪敘之。

文辭婉折。意旨懇惻。尤足警勸人。

○棄兒歌　雲井龍雄

斯身飢斯兒不育。斯兒不捨斯身飢。捨是邪不捨非邪。人間恩愛斯心迷。愛々不禁無情涙。復弄兒面多苦思。焦心頻屬良家救。欲去不忍別離悲。橋畔忽驚行人語。殘月一聲杜鵑啼。

内田遠湖云。自古英雄多極有情之人。如鎮西八郎。曾凌兄逆父。横行九國。何等豪膽。一旦聞父爲己坐死官。決然趨歸。待罪平闕下。又何等惻怛。蓋雲井氏亦鎮西八郎之流亞。吾讀斯篇。而想見其人也。

○棄婦行　村上佛山

倘有新月眉。倘有白雪肌。怪來同穴契。忽爲生別離。君心可黄又可黒。百年使妾泣練絲。只願留妾連理帶。裂爲良人履頭綦。妾身分一死。胎中奈有子。珍重應鞠養。定與君顏似。縦得掌上珠。靡父又何怙。涕零如雨將上車。梨花無力有誰扶。倘是良人所手寫。十襲懷來離婚書。

內田遠湖云。此等作。眞有稗於名敎。讀至結句。雖無情之夫。亦且泣然淚下矣。



○打つより撫でよ（第三回）　寸草隱士

浮世の事に關係ひ粂路の橋のそれならねども、此小説も中絶えたれば、看官さぞな待ち給ひけめ。ナァニとんな小説、それでも誰れか待つ人、ありとし聞けば、書かぬわけにもゆかず書しまくすれば暇つぶし、コヽへ何とせんと計りに、泣かぬは泣くに眞丈夫が、熱腸を寫せし此小説に限り、幽靈然と立消は致さぬ覺悟の寸草隱士、大矢主筆に責められて、一夜漬のなぐり書き、これ皆雜誌の御爲を思ひ、長嶋社長御家の繁昌思ふて呻る阿房陀羅ぶし、鰹飾と間違ひて、召食りても衛生に害なく、難有さうに讀み上げても、米相塲の下落することもあらず。唯此雜誌を讀む人々は、インフル

エンザに、冒されぬ功能ありとか。此心根不憫と思しわけられて、よし向後も緒絶の橋の絶々なるも、互に此所は信夫山、こえし戀しと思召し、狹布の細布胸せまく女心の一筋に腹をなたてそ心だに變らであらばいつかまた、嬉しき顔を三芳野の、田面の里も頼もしく、雁の翼に通はそる、文よかへてん此雑誌は、人にしあらば浮名やたゝん小夜深更て、松にまたるゝ姫御前と共に子の日と閨の内、燈火かゝげ手枕に、梅が香れくる松風と、音なふものは雑誌ばかり、思ひ寐の夢の中、寐覺の床のうつゝにも、柾木のかつら末長く、今の御心變らせられず、御贔負あらんことを祈るになん。

吉凶禍福は糾へる繩の如しといへるに、何かたがふことあるべき。されば、れ妙は少年の走り行く背後目送りて佇立みしが、惠投れたる數多くの、金員を受納めてよき事か、惡き事とば夢にだもせしとなければ是れもまた、日頃信ずる神佛の御利益と手は合さねど心の中、暫時そなたを伏拜み、數改めて大に驚き、少し計りと思ひしにコヘ如何に、談話に聞けど見ると難き、銀貨十枚ありければ、これはくと吉野山、鼻うちかみて思へども、思ひ附かぬは彼の少年、わらはの難義を察しては、打も置ずて大金を、惠與れしだに添なきに、先刻の惡少年輩を、擊たで許せし事の理由、猶其他にかにかくと、添ゆる言の葉繁からねども、誠心見えて淡雪の、溶解てあとなき妾の悲み、皆是れ彼の人樣の恩賜にて、妾が一

家の爲には、最上き慈悲善根にあなれども、彼の人さまの名をも得しらず、宿所をも知らで苦しき胸の中、心の底を打明けて、禮を述ぶべき術もなし。物思へとや其儘に、姿隱せし潔白き、現時の人は不殘といふにあらねども、唯名を賣るに心と傾ふけ、慈悲善根の會とても、其實あるもの稀少なりとか。妾は女の身にしあれば、委細しき事は呉竹の、世にさるとのありけるか、得こそは辨へ知らねども、偶々細民救ひしとて、玲々しく其名を掲げ、記念碑懇親亡年と、酒宴などには骨を折れども、それより先は行止り、筆と口には貧民救助の事をし云へど、法方を講じて實施せしとの、ありやなしやは都鳥に問ふより、借金取に問へといふ量見にて、松の操も雪中に顯はれ、濁れる浮世に、彼の人さまの如きはまたと得離きとなるべし。思ひ廻せば廻す程、庭の敎の行屆き、父母の人品も嘸かしと、顧へばなにとなふ懷しく慕はしく。履歴ある人の其名を此世に隱すにや、それともかくも、浮きたる心はもたなくに、今一度彼の人さまに遇ひて其名も聞まほし、一言なりとも禮を述べ、思ふ心を告げまほし。もしや寸草隱士に非らざるか、それかあらぬかと計りに、思ひ過でしれ女の常、暇もあらば尋ねて見ん、再び過へぬとかはと、金子をとりつ戴きつ、其儘帶に雲隱、おとたゝきつけ莞爾と、アナ可笑、先刻よりこゝに立盡し、大理石にて刻みたる、肖像とや人は見ん、益なき諄言、人にや聞れん鈍ましや、いざまからんと、右手に手籠

とり上げつ、左手に前掛の塵うち拂ひ、四方見廻し、足れ運も速かに、背後て吠る白犬も甜りし鶏卵の禮を、述るかと思へば惡からず。若し彼の人さまの來るもやすると、後を見返りニコ〳〵と、顔にしまりも打擊れし、恨も今は打忘れ、さして行衛は下谷區の、金杉八年町の畫所、野口金藏の貸長屋にて、何年前に建築たるよや、家屋といふは名れみにて、柱傾ふき廂破れ、見るかげもなき不樂住居なれど、阿房の金殿玉樓も、原憲が蝸牛の茅屋も僅かに風雨をしのぎて、膝を容るゝに過ぎず。住めば都と悟りたる、五十わまりの一人の老人其身を病の床に困臥たるは、れ妙の父なりける藤野守義なり。昔時は中國方の、歷々たる武士なりけれど、同役の某に讒せられ、圖らず浮浪の身となり、良藥は口に苦く、孤忠かへッて仇となり、一片の赤心訴ふるによしなく、吾短褐を身にまとふて、路傍に餓死するも豈再び肥馬の塵を拂はんやと、其が儘家諸道具を賣却なし、幾何もなき貯畜を身につけて、昨日までは美々しく、四民の上にもたつか弓、矢猛心は武士の常とはいへど住馴れし、居所を去るはしかすがよ、名殘を惜む若黨下僕、下婢鍼妾にいたるまで皆夫々に手當して、暇いだしつ奧方は、此年七才になりける愛兒愛之助の手を引いて、夫婦諸共小女と、同國なる新庄といふ所に家を購ひ、此所に落付けるとぞ。かくて做す事もなく坐して食ふべくもあらねば、讀書の指南をして貧しくもなく暮しゝが、馴るゝに早き人





心、寒暖の挨拶より追ひ〳〵と行きかへもして、淋しからずなりにけり。そが中にわけて親しきは、近所に住みける下村喜平となんいひける商人にて、篠野夫婦の此所に來りしより、そが落魄を憐みて、なにくれとなく世話してけり。元此喜平は荷を背負ひて、近在近郷の小商人なるが、心掛の正しき者ゆゑ、人々の受もよく、喜平々々ともて囃されて、正直の頭に神やどる譬の如く、思ひの外に利潤もあり年も年ゆゑ女房と迎へ、今の所に呉服店を開き、中睦ましくたち働きければ、追々と冨榮ゆれど、夫婦ともに慈善を好み、人々の爲には金錢を惜まず、そがため貯畜も乏くなるほどなりければ、誰いふとなく此店をほどこし屋と呼びけるとぞ。

此度の插畵は二十四號に出すべきものなれど、隱士要事と病氣のため下畵もれく〳〵れて此號に出しぬ。此畵は打つより撫でよの一主眼なれば、本文と合せよく〳〵御覽あらまほし。

正誤。前二十四號無常の金も鏗然と、聲を放ッて燦爛たり、とのうち無常は非情の誤り、是れ實に隱士の非常の筆誤りにて、其他は關係なし。

前二十六號には插畵の大附錄あり其半例は是非一讀すべき價直あり。

二十六

(なぐりがきの隱士ふたゝび識す)



○女子眞論(春園主人著小本一冊六十七頁定價金二十錢 芝區愛宕下町鴻盟社本郷區元富士町盛春堂發賣)

近頃愉快なる一書こそ現はれ出でたれ、之を春園主人の著にかゝる女子眞論となす。女子眞論の論ずる所僅に尊卑眞論、同權眞論、職務眞論、情感眞論の四ヶ條に過ぎず。然れども其の論ずる所、殆んど皆着々肯綮に當り、眞に眞論の名に背かずといふも、敢て溢言にあらざる可し。殊に今日に於て忌む所なく憚る所なく、古人の所謂三從の說を贊成主張するは實に大胆なりと云はざるべからず。而して其の趣旨は、吾人も大に贊成するに躊躇せざるものなり。文章また平淡大に賞すべき所なきにあらず。嶋地默雷氏の題字、下田歌子の題歌及び梅花女史の序文は、更に一段の色を添ねたるを覺ゆ。慾には文章全体に假傍名を附せられたかりし、と吾人は思ふ。

○俳諧矯風雜誌（東京日本橋區蠣殼町二丁目四番地俳諧矯風會發行）

維新前勤王家なるものあり、王に勤めざるべからざることを論じ、之を行はんとす。是の時に當り勤王の二字甚だ貴かりし。其の後浮浪の武士、落魄の書生天下を横行して皆口勤王を唱ふ。是の時に當り勤王の二字漸く價値を失ふに至りき。近年に至り改良とか矯風とかいふこと社會に現はれぬ。其の顯はるゝや、世人大に其の說に感じ其の論に服しぬ。乃ち改良矯風は是の時には大に價値ありしなれども、漸く濫用の弊を生じ、如何なるものにもヤレ改良なり、ヤレ矯風なりと遂に何人も耳欹てぬに至れり。然るに齋藤芳逕、天原可然等の諸氏が發起に揭る、此の俳諧矯風會は、流石其の道に熱心なる人士の集合だけありて、基礎も甚だ鞏固なりと聞く。又其の發行する同雜誌を一瞥するに大に見るべきものあり、其の前途の隆盛期して待つべきなり。吾人は是れ等こそ眞實の矯風會なりと信ず、又其の眞實の矯風會ならんことを望んで止まざるなり。

○美人車——對——思案外史　　大竹忠太郎

大家？大家？嗚呼現今我文壇に大家の澤山なる實に鼻を衝く。而して大家號を得んとする方々は、テモと稱する條件の附帶することを

記臆せざる可らず。如何なる名家も大家號を得ると共に、凡作ばかり出るは其實例たり。觀よ「おぼろ舟」は紅葉山人の大家となりし後の凡作にして「勝閧」は篁村大人の大家となりし後の拙作あり。さて〳〵大家號は取ッても餘り有難きものにあらず。（尤も生に與へる人もないが）

此頃文明の母紙上に掲載せられし「美人車」を讀みて、外史も又此惡魔—正太夫の—に取附れしかを疑ふ。大家病と流行感冒は近來の流行ものなれば、御用心〳〵。

嘗て忍月居士江湖新聞紙上に「ちぴてる雅話」なるものを掲載し、紅葉山人のいつも女主人公を寫して大當りを締むるを賞されたり。元より紅葉山人と思案外史とは其得意とする妙所に差異あれども、外史も又女主人公に大當り多し。彼の「乙女心」の如き、「京鹿の子」の如き、皆これなり。然るに此度の「美人車」は面白くなきこと甚し。全篇六回、皆「娘節用」「梅暦」などの如きものに……？！—など云ふ器械を巧みに應用せしものにして、少しも趣向ふ變化なく、且おりやうと細君とは異身同体の代物、殊に結末に至り、おりやうさ吉川初と夫婦にされしは出雲神社へ上告せざる可らず。日頃人情に注意さるゝ外史にも似ざる不理屈なり。これではおりやうが艱難辛苦をして、駒形を慕ッたのは夫れを囮に、玉の輿の榮を得んと謀ッた如く見えて感佩する能はず。

さて此外に文句、言葉に申上げたき所は隨分あれど、生少しの障害のため、此「美人車」は詳しく拜見することを得ざりし如き繁忙、依ッてまづ本號はこれにて筆を洗ッて、おさらば〳〵。



〇幼女盗賊を感せしむ

山下重民稿

安政れ頃かとよ。深川に住けるなにがしか家にぬすびと入りて、夫婦をいときびし

くいましめ、さて物さがしてむと、夜具の上をそゝろありきせしに十歳になれる小娘の足を蹈けれは、彼娘は驚きて起きみれは、こはいかにふた親はともにひゝといましめられてありけるにぞ、かなしき事かぎりなく、ぬすびとの衣裾よすがり涙せきあへず、父母を免してたべと泣きふしぬ。盗人は此ありさまをみて、そはこがねまれきぬまれあたへなば助けなむ。はやく案内して出しねといひけれは、娘いすこし喜べるれもゝちにて、さればわがひごろ愛て寶とし、とふとびける物こそあり。こはさしわげがたきものなれど、父母の命にかへ思ひきりていたしなむ。いとをしき物よ侍るなどいひて、かひがひしくかたへの小箱より何やらむとりいだし、其前にうやうやしく置きけり。盗人はをしき物とこそいへば、定めてよき獲ものならむと、之をとりてみれば、小さき人形よてありけり。あまりの事なれば、盗人は茫然としばし辭はなかりける。さて心中に思ひけるは幼きものゝ無心なるは、まことよあいらしき者なり。かゝる小さき人形を寶とし、ふた親の命よかへくれよとは、さてもあどけなき心ばへかな。いかに我心をみづから鬼にするも、かゝる無心なる者のありける内のたからを取り去むや。嗚呼あしきことはせぬものなり。今より心をあらためばやと、盗人なれどさすがに彼があどけなきに感じ、夫婦のいましめをときて、一品もとらず立ち去りぬ。さて盗人は其日より武

き心を柔げ、あしき行ひをあらため、眞の善人とはなれり。しかはあれど、後ふるきわしき事のあらはれて、とらはれの身となりける時前の娘のあいらしきありさまを語りいだしけるにぞ、奉行所より彼娘を召され、白銀五枚を賜はりて、さきに双親を救ひしを賞させ給ひぬ。柔能制剛とはかゝるたぐひをいふならむ。其名を聞もらしたるぞ遺憾なる。

○支那の離縁状

山下重民稿

支那にて夫婦の縁を斷つを、離婚若くは長還といひ其去れたる婦を、出妻若くは出婦去婦といふ。而して其離縁状は、いかに書するやを知ざりしに、偶々板倉博道筆記を讀みしに之を載せたり。左に抄出して一粲に供すべし。

康煕五十三年八月十六日　立休書

妻旺氏同床三年恩情此絶今任改嫁永無爭熱是自行情愿即非相逼恐後無憑立

此文約爲照　錢三郎欣白

星之張生足下　郎の字の所に印あり

左の一篇は文藝欄内に掲ぐべきなれど、印刷の都合に依り止むを得ず爰に載することゝなれり。請ふ諒せられよ。

○成立學舍女子部卒業式兼第三紀會祝詞　　棚橋絢子

或る漢學の博士いひけらし、詩は情の語にして、文は意の語なりと。情の語はもはら修飾をかるものから、温柔敦厚をむねとして、うらゝなる春の日に花間の鶯の聲をかしく囀つるか如く、品高くあはれ深き趣あり。意の語は辞達してやむといへ、高明正大を本として、さやかなる秋月の桐の葉末にくまなくてり渡りて、ふところの中に宿れるか如く、心涼しく至り深きれもゝちあり。女子の性質は情の語に似かよひて、男子の氣性は意の語に近しとや云ふべからん。男文字の女子にふさはしからで、女文字の男子にまはならぬも、此けじめある故なるべし。さるは情の語をそか儘女文字に寫して、一部のあや言葉となし、いとも哀れにかきなしたるは源氏物語にして、花間に囀つる鶯ともいひつへく、女子の性質は此文を姿見の鏡として、大方は過つふしなかるべし。そが上に色かへぬ心の操は、桃花の紅ゐのいつみてもあかく、楊柳の緑のとこしへに青きか如くあらまほしく、學びの業は月瀬の梅の早くより匂ひ出るも、芳野の櫻の心のどかに咲初るも己がじゝなるべけれど、自らなる色香をうしなはずして、世のもてはやし草とならんこそよけれ。けふしも成立學舍女子部の卒業式をものせらるゝめでたきむしろに侍りて、めでたしともことわけせずして、かゝる博士ぶりて耳遠き事いひ出でたるは、近頃政談てふことと世のはやり物となりて、意の語はれろか、大聲疾呼もなし得まじき女生徒のありとしきけば、己れが親愛せる卒業の君達も、今より保母の手をはなれて、社

會といふ廣き學校に入立ん際に、薫猶器を同しうするたとへにもれず、ともすればうつり染んことのいとをしければ、其誤りあらせじとての老婆心なり。はた是のみならずして猶一くだりいはまほしきは、此式とゝもにわげらるゝ女子部創業の初より、みめぐりの春にあたるといふなる第三紀年會のはきわさなりけり。そも〳〵三は一終の成數にして、古へより世にもてはやさるゝ好文字なり。其五ッ六ッをあげていはゞ、天地人の三才、智仁勇の三徳、君臣父子夫婦の三綱はさらなり、三載考績といひ、三年にして有成といひ、三月不違仁といひ、三以天下讓といひ、君子所貴於道三といふの類、皆經書に見えたり。吾國は三種の神器ありて、天下無比の至寶となれり、皇統一系の萬世無窮なるも、此至寶によるとぞいふなる。たとへていはんはいともかしこけれど、我女子部の教育に於ても三種の寶あり、一に曰く女徳、此寶は温潤にして圓きにすぎず、含蓄ありてかど〳〵しからず、一家の政を委任して主じの信用を置に足り、賢人君子英雄豪傑の母となりて、世の摸範を遺すに足る。璽とやいふべからん。二に曰く女學、此寶は磨くが上にも磨き、礪くが上にも礪ぎ、光輝發越四表に透りて、能く物の美惡を分つ。鏡とやいふべからん。三に曰く女才、此寶は時ありて内助ともなり、物を裁斷する力ありて護身の要具なれども、之を濫用すれば身を傷つけ人を害ふ、愼みて錦嚢に藏め、猥りに鋒鋩を露はすべからず。劍とやいふべからん。右の三種あらんかぎりは、紀年會を重ね〳〵て三十年三百年となり、生徒の數を重ね〳〵て三千人三万人となるも、女子部の隆盛は一日の如くならん。あないみじきかも、あはれめでたきかも。つゝみて祝すと云ふと然り。

○普魯西國の皇后

鶴城仙史

普魯西國王フレデリック、ウィリアム第三世の皇后は、彼佛帝那勃翁第一世が世界第一の美婦人なりと云ひしことありて、其美麗なること、其淑德あること、及び其耐忍不拔の氣象あることは、當時知らざるもの無かりしと云へり。若し皇后にして、太平の世に逢ひたらんには、唯美麗にして且つ事業を逃すの婦人たりしのみならん。去れども、當時は多事の日にてありければ、其身を此中に投ぜざるを得ずして、常に極めて危急の場合に臨み、其一生中の行爲は、其夫フレデリック王の古今稀れなる大事業と與に、竝び馳せんと勉め玉ひしこそ、勇ましき限りなり。

去れば彼ティルシット和睦の成りけるに先ちて、那勃翁と聯合軍の間に休戰ありしとき、普魯西國は平和の盟約を爲さんと求めたれども、佛帝は是迄諸國王の畏れ敬ふ所となるに慣れたりければ、此時尚ほ其壓制主義を扣ふることを知らず、最とも非理傲慢の擧動ありと、普國王は其前に身を屈むることを拒み玉ひけり。斯る有樣にてありければ、普魯亞國の大臣等は、彼れ是れと心を痛めし餘り、若しも皇后陛下を出したらんには、盟約を和らげ、和睦の情をして更に厚からしむるの、手段と爲ることもやあらんと思ひけり。扨皇后は其身に受りて、最と大なる務めあるに當りては、如何なる地位に立つも

三十三

勉めて之を爲さんの氣象ありければ、大臣等の願ふを聞き玉ひしより、直ちに兩國軍の屯しける本陣へ出向ひ、其滿ちて溢れんばかりの熱心と、機に臨み變に應ずるの敏捷とをもて此役目に當らんとは爲し玉ひけり。

既にして皇后ハ、己れの爲めに、用意せられたる旅館へ車を下し玉ひしに、佛帝那勃翁は早已ょ其來るを待受けたり。斯る初對面の時に當り、相手に向ひて相應の尊敬を行ひ之に接することは流石の皇后も、其地位に對し容易の業にはあらざりけり。去れども皇后は最と巧みにして、且つ味わりげに佛帝に接しけるが、其高尚優美なることは、唯偉人豪傑のみ知るべき所にて、凡人は窺ひ知るだも叶はぬほどなりけり。斯くて皇后は佛帝に向ひ、其旅立ち來れる目的は、和睦の條約をして更に圓滑ならしめんと、帝ょ願ふが爲めなりしも、帝は此事に就きて最ど情なくも、拒まれたりとのことゝなれば、折角の目的も如何あらんと望みを失へる所なり、なと最と患實しくも語られたり。佛帝は其對語の進むに隨ひ、心を傾け聞き居たりしが、皇后ょ問ひたまふやう、

御身は貴國が余と戰ひを爲さんとせることに就きては、如何ょ思ひ玉ふか。

皇后ハ形を改め、最と温雅に、

御仰せにハ侍れども、良人フレデリック大王は我國民の鋭とく騷ぎ立ちたりしより、

終に踏み迷ひて此に至りたるものにて、縱令欺かれたるにもせよ、此は抑も一時の事にしあれば、王には小しく寛大の御心を垂れ玉ふべきには侍らずや。
と答へ玉ひけり。

皇后は、ティルシットに兩三日留まりし後ち、メメルへ歸り玉ひしが、夫れより間もなく普魯西、佛蘭西、兩國の間に和睦條約の調印成りて、彼佛帝の最と高く、且つ大なる權力は、最早其終りを告ぐるに至りたり。

凡そ婦人は、天性柔和にて、何事を爲すにも、丈夫に劣ることは有勝ちなれども、時により事によりては、丈夫の爲し難きことも容易に爲し遂ぐることあり。去れば柔能く剛に克つと云ひ、又男と男の爭ひに、婦人其間に入り、甘く周旋して宥め解くことあるは、何人も見聞きする所なるが、前に云へる普國皇后の如きは、特に其務めを盡し巧みに彼我の間を取繕ろひたるものとこそ云ふべけれ。顧ふに佛帝那勃翁も、音に名高き英雄なれば、一通りのことにては、容易に肯がふべき筈もなし、去れば皇后の之に對せしときは、定めて千々に心を碎き、如何にせば其氣に入らん、如何にせば其心を和らげんと、思ひ詫び玉ひしこととなるべし。

婦人の嫁りて、家を持ち子を擧ぐるに至り、年月の永き間には、其夫や其子が、友人と不

和を生ド結で解けざることもあるべく、又他の人と爭ふこともあるべく、此時之を解き、之を慰め、交際を全ふし、互ひに利益を得せしむるは何人ぞ、妻たり母たる婦人の外、別に其人あらざるなり。去れは婦人たるものは、年若き頃より常に心を此に留め、後ちには彼れを繕ろひ、此れを補ひ其家をして和氣常に滿たしめ遖ばれ文明の母たり妻たらんことを務むべし。

○ウーシヱーヌ后の逸事　　衛遠樓主人記

ウーシヱーヌ后は、奈破崙第三世の皇后にして、夙よ令德高き夫人にてありき。后が帝と結婚後未だ程經ざる比とかや、帝は多情にも或る伊太利亞の美人を眷戀し、忍んで割りなき中とはなりぬ。或る人の説に此の婦人の名は、コンテッス、ド、カスチクリオヌと呼ばれ、シャンぜりぜー街と云へる所の一宇の美宅にぞ住はれけるとなんいへり。毎夜帝は、窃よ大なる外套を被り隱れて通ひ給ふ。當時の大警視ピエトリ氏は巡査の密報を以て帝が夜中微行を聞き出せしものから、已が信任せる巡査數名及、警部へベルに命じ、最も密に、帝の行路を護衛せしめたり。巡吏は注意して極知れぬ樣に尾行しけれども、遂には帝も之を知り屢ば歩を返へし、路を轉じて巡査を近寄らしめざりし。大

警視は下役よりの申立て前の如くにして、帝を見え隠れに守衛することの甚だ難くなりしのみならず、數名の以太利亞亡命の徒、帝の夜行を窺知し、窃に帝を冒し奉らんとするの報を得、既に彼れ亡命の徒は、コンテッス、ド、カスチクリオヌの家に隣れる屋宇を借り入れ、殆んど其隱謀を實行せんとするを探偵し、大に苦心痛慮を増せり。ピエトリ氏は、其危難の迫るを以て帝に上書し諫めて夜行を止まらしむるか、或は巡吏が密なる保護を受く可き旨を陳述したりき。然れとも奈何せん、帝は大警視が訴ふる所を毫も以て意に留めず、依然として夜行を戒めざりしかば、ピエトリ氏も我が職任か重くして、萬一非常の災禍あらんを怖れ、遂にウージエヌ后の許に至りて悉しく是迄の顛末を申述たり。或る夜帝は食後我室に至らんと皇后に暇を告げて去らんとせしを、ウージエヌ后は、強て帝を留めまいらせ、潛然として涙を流し、夜間微行せざらんことを情願せしに、帝は之を背するの色なし。是に於て后は帝の足下に跪きて曰く、

妾切に請ふ我か佛蘭西國の爲め、且つ皇子の爲め陛下が情願を斷然思ひ止まらんことを。

と、而して毫も彼の女の事を云はすと雖とも、心中の憂苦さこそと察せられたり。帝は幼稚なる皇子の爲め、母公の悲歎落涙して切に請はるゝを見て其夜よりして微行を爲

三十七

さゞりしとなん。其後彼の以太利亞美人も佛蘭西を去り、又彼れ亡命の徒も佛國を追ひ拂はれしとかや。

○雜記畧抄

空存庵主人寄送

富人のいましめ

饑歳は天地の變にしていつあるへき事か、前かたより知るべきには非ざれとも古き書にも六歳に一饑、十二歳に一荒なとゝもありて、我日の本のいにしへより、饑饉の事は史乘にものせ雜說にも見ゑて、三四五十年の間には必ずある事のよしいへり。畢竟天地の變天の人といましめたまへるまて、太平の御代豐年打つゞき、人々御恩德のわつきにあまへて奢にふける時は、天より饑饉を降して人を戒めたまふ。是れ天の人を憫み給ふにて、永く目出たき御代のしるしをあらはし給ふなり。國無道にして五穀豐稔するは、天の見すて給ふなりといへり。されは人々饑饉は天の御惠と心得、手當によりわざわひをのがるべき事を知り、其身を愼み御制度を堅く守り、粥を啜り、酒宴せず、粗末なる衣服を着し、住居の好みなど省き、人と爭はず、仁心を本として、自分の力の及ぶたけは、人の飢寒を救ひ、生死を共にする心得第一なるべし。人の死ぬるをも救はず、その身計を思ふは身勝手にして、天の御心にたがひ神慮にも背きて、まのあたり重き御

罰を蒙るべし。よく〳〵此意を辨へ、奢りの心をやめ、其身を愼みなば天のなすわざわいも猶免るべき事になん。

金銀米穀を持てるものは、その身のはたらきにて身上よくせしなれば、あながちに身代をふるひて、人をすくひ候へといふにはあらず。饑飢の節は憂患をともにする事、古へのれきてなれば、己が家内計生殘らんとのみ思はす、成丈は人に施すべし。善を積むの家には餘慶ありといへは、損とはならすして子孫の榮となるへし。

自分の身ばかりをはかりて人に施さゞるは、遏糴とて唐にてもきつい法度なり。背く時は罪におこなはるゝなり。身分富貴にてさし當りこまる事なけれとも、飢饉のほど何年つゞく事も、はかりがたしなどゝ思ひて、身をかばひしわくして施さす、かく人々心得たがふ時は、米穀金銀一所にあつまりて、融通なし。御世話ありとも、爭か普ねく飢を救ふべき。町々國々の豪商等かみより一々〳〵身上、分限、御根究なき前に、自分々〳〵早くよりわきまへ、有余あらば施すべし。飢饉の救ひにて身上を失なひたりといはれなば、生前の面目、こゝろよき事ならずや。又すくひをうくる者も、受ざるものもみな〳〵、その性に感じ、口々にはめたてなば、天の視る事などてや、人の見るに從がひたまはざらん。仁君などて知しめさゞらん。循吏なんぞ察せさらん、いたづらに金銀米穀をいた

三十九

きて、金の番人、無慈悲の人と呼るゝこと、口惜しき事ならずや。凶饑甚しければ命旦夕にせまり、火にやかれ水に溺るゝことゝ同じ事なれば意を決して速に救ふべし。

隣國は人も人なり。自國の人も人なり。中あしき人も人なり。四海は兄弟ならずや。我子かわゆければ、人の子のかわゆきも同じ。天の御眼より見れば、皆人御子なり。飢饉難澁の時は天道へ御奉公と心得、上下とも難苦をともにし、人我のへだてなく近親より施しを初むべし。

身上よく施しするもたかぶるべからず。就中浪人、讀書の師などは無祿にて、不農不商不工、生産にのみかゝりがたきものなれば、貧しき人も其中に數多あるべし。富める人は必ず之をすくふべし。仁義をする人を輕んずる事なかれ。其他すべて武藝する人、及び算術手跡の師なる無祿なる人は勿論、夫々原くすくひてその難をのがすべし。

貧者のいましめ

米穀高ければ、人の氣たつものなり。他人は物を奪ひても、わが命たすからんと思ふゆゑ、不慮の事をも起すとあり。是第一につゝしむべき事なり。上には父母とあふぎ奉る　君のましませば、いかで見殺になしたまふべき。又國々、在々、所々、僻遠の地に至るまで、國主領主ありて治めらるれば、夫々御手當ありて御救ある事、相違なければ、人々

心をれちつけ氣遣なき事をわきまへ、うすき粥をすゝり麥引わり、大豆、小豆、穀類、數々海草にも昆布、あらめ、ひじき、など多く其外飢をしのぐもの數々あれば、力を盡し如何にもして飢をしのぐべし。かりそめにも人を僞り、又は爭ひがましき心をれこすべからず。わざはひは下よりれこすならひなれば、此所をよく心掛べし。

其身貧しきは骨折ても不仕合わり。又は心掛わしく平生れごりて、衣食住の爲に費し、飢饉になり貯なきは、自分のゆだんなり。つら〳〵遠謀深慮、人の富貴をうらやみそねむ心わるべからず。平生中わしくとも惡むものわらばかたじけなくうけて、その恩を忘るべからず。是まで自分のゐこたり、不始末なるを後悔し、志を改め善人となるべし。又自分かねての心掛なく餓死するとも、自からなせるわざわいなれば、誰をかうらむべき。然るに心得違のものれ死なんよりは腕ずくにても、人のものを奪ひ、活命んと思ひれち、己れのみか人までもさそひたて、大勢徒黨しらんぼうに及ぶことは、惡人等の所爲重き御法度をやぶり、盜賊の働に當り、御仕置となるは目前なり。たとへ免れて長命するとも万一ありとも、天にたがひ君にそむきて、莫大のとがと犯しなば、うしろくらき事いふばかりなく、高き天もひくゝ、あつき地もうすく覺へて、廣き世界もせまかるべし。是人と生れし甲斐なきにわらずや。鳥さへも雨ふらぬ前に巣を固くし、人の侮をうけ

ず。人として父母妻子の手當なく餓死せしめば鳥にも及ばぬ事あさましく耻かしき事ならずや。

凶饑悲慘の狀を記す

享保丑年の凶饑に、上方の豪商米うりきれたれば、金持ながら寶のもちぐされにて、難義を極めしと、我つゐといふ書に見ゆ。

寶曆五の飢饉にある人、越後の國へゆきしに、流草滿路多し。ある家にたちいり見るに、小兒二三人を柱にくゝりつけたり。何故と問ふに飢に候ゆゑ、兄弟たがひに食合候に付、かくするといひたるよし。

隣家にて、何かさはがしかりしかば、何事ぞと尋ぬるは、箒うる翁、一飯をこひしゆゑ、飯にしゝみ汁をそへてあたへしに、喜悅のあまり狼呑して氣絕せしなりと、湯河洲叟語りき。

食物なくては婦人の乳出ざれば、乳房をくひ切られ死するものあり。又は親にくひつく子供もあれば、せひなく櫃の中へいれ死を待て捨つるもありしとぞ。

天明の飢饉に、百金を腰にせし浪人餓死せし事ありしとぞ、是れ前の豪商とおなじく米の拂底なりし故なるべし。嗚呼、金銀珠玉うゑて食ふべからず、寒て着るべからず

と、誠にしかり。　同時わけて大飢饉の所にては、食物つきて牛馬の肉、犬猫までも食ひつくし、遂に家内殘らず枕をならべて死にけり。かまど四五十もありし里々も、みな死つくして亡き跡弔ふ者もなければ、死骸は堆積て腐爛、鳥獸のゑじきとなり、一村蕭然あはれさたとへん方なかりしとぞ。自から見ぬ人は飢饉たりともさまでのことあるまじと思へるは愚なる事なり。

享保午の秋、米頻りに高直にて万民困究し、盜賊所々に徘徊す。夜分往來なく晝も僻遠の人家なき所は、往來なかりとぞ。

○餘興

○上戸好きの文章下戸好きの文章

鐵筆將軍

おのれ酒を好むといふ程にもあらねど、能く飲まざるにもあらず、餅を嗜むといふほどにもあらねど、よく食はざるにあらず。故に純らなる上戸にてもなく、又もばらなる下戸にてもなし、自らこじつけて中戸とはいふ。既に中戸なり故に勿論駒込のづぶ六先生にも愛せらるゝとなるべく、また敢て戸城の大人にも憎まるゝことはなかるべし。嗚呼中戸なるかな、中戸なるかな、中戸の德、否得たるやまことに大なり、常に雙方のうまき所を摘み、而して雙方に對して恐れ入るに及ばず。　隨ッて其れにつきての議論文章の如

きも、決して一方にかたよらず、一方にかたよりて、むづかしき考を費すに及ばず、何でもかでも、雙方宜い加減にもちあげ、雙方の笑顔を拜むを得ば事足る。豈無雜作至極にあらずや。 れのれ頃日何がなひとつ其の無雜作なる文章をかきつらね、雙方の御機嫌伺をなさんと存ぜしが、不圖風來山人の清水もちにつきての文章を考出し、之を其のまゝかきたてなば、尚更に無雜作なるべし、然なり然なりとうなづきて、ものしたるものは左の通り。

きよみづもち口上。

世上の下戸樣方へ申上候。 そも我朝の風俗にて、目出たき事ゑもちひの鏡、子もち、金もち、屋敷もち、道具に長もち、魚に石もち、廓に座もち、牽頭もち、家持は歌に名高く、惟茂武勇かくれなし。 かゝるめでたき餅ゆへに、此の度れもひつきたての、器物もさッぱり清水餅、味は勿論よひ〳〵と、御贔負御評判の御とりもちにて、私身代もち直し、よろしき氣もち、心もち、嚊もやきもち打忘れ、尻もちついて嬉しがる樣、重箱のすみから隅まで、木ゑ餅のなる御評判奉願候。 以上。

一篇の文字、餅を以て始まり餅を以て終る。 而して其の文意の將に斷れんとして斷れざる處、猶水餅の無性失錯につながるが如く、其の高慢の鼻を謙遜の筆もて包みたる處、猶櫻餅、柏餅の木の葉を以て掩ひたるが如く、其の豐富なる處、脹餅のごとく、其の淡泊なる處、からみ餅の如し。 是れ之を所謂下戸文章のかゞみ餅とも謂ふべき歟。

清水もち口上書第二番。

私餅店の義、町中御下戸樣方御贔負御取立を以て、段々繁昌仕りありがたく奉存候。

然る處此あひだ底貫鱗右衛門樣と申す生醉樣御出なされ、巻舌にて御意被成ますは、ヤイ亭主、清水といへば水に縁ある酒こそ賣るべけれ、何ぞや野暮な餅店を出し、下戸めらをうまがらせ、錢をせしめんとの謀、言語同斷の次第なり。汝が口上書をみるに、皆身勝手のせりふなり、我上戸の眼より見れば、餅ほどの穢らはしき物はなし。先癇持は腑を苦しめ疝氣持は睾丸にもてあつかひ、女郎の末は積持となり、かげまの果は痔持となる。子持は女の色氣をさまし、やきもちはあいそをつかす。不器量のあくたいを棚から落した牡丹餅といひ、湘圓ばかりの寡獨をかしわ餅と異名せり。とりもちは殺生戒を破り、むぐらもちは植木をそこなふ。高望王は下總に朽ち果て、持氏は鎌倉に亡ぶ。秩父にれはさき持あり、四國に大神持あり、賤き事を荷持、歩行持といひ、不首尾なことを手もち無沙汰といふ。身持氣質は附合をしらず、餅喰は相手がいやがる。鎗持は鎗をつかはず、金持は金をつかはず、辨當持先へ喰はず。かゝる不埒の餅ゆゑよ、下戸の建てたる藏はなし、早く相止め然るべしと青筋はッてぞ申しける。

右の返答よ上戸を一まくりにやりこめ餅の利運に相成候文談、跡より出し可奉入御覧候。以上。

亦又餅を以て始まり、餅を以て終る。其の生醉樣が癇積もちを起し、巻舌にてのゝしるさま睹るが如し。而して憎氣を全く胡桃餅、ホンの正直の堅餅にていふことなれば、如何なる下戸も之を聞いて恐るものはなかるべく、たゞ牡丹餅もて煩邊を叩かるゝが如き心地やすらん。チョイト生醉株、歸り途にて醉歩蹣跚、溝に陷ッて渾身泥に塗れ、所謂餡轉餅となりたまへろ、と或る下戸が親切に注意せしも眞に御尤至極といふべし。

大竹忠太郎戯稿

○一口話

「文明の母」に一口話を掲載すると聞き、我れ先登第一の巧名手柄して、天晴れ日頃苦虫然たる方々をアヽヽと大笑せしめんと大願を起し、余が最愛なる三福未満嬢を甘酒にて、酔はしめしに、ホヽと笑ッてお喋りしたハ左の如し。

○鉄筆将軍の肺病、ちよいと松子さん貴孃此頃の文明の母を御覧んなすッて?「ハア、妾ハ文明の母ハ毎號見てヨ。「サウ、ぢやア将軍の病氣ハ御ぞんじでせう。「知ッてるノ、妾ハ心配でならないから、成田の不動さまや讃岐の琴平さまへ、何卒一日も早く全愈するやうにッて、お百度を踏んで居るノ。「チヤ〳〵大さう御心配ですネ……でも明後日ハ全快しますヨ。「何故?「だッて大矢(紺屋)の明後日と云ふから。

○美人車　文明の母の小説ハ毎度面白いが、別して美人車ハ面白かッたが、一体アノ作者ハ何んと云ふ小説家だネ、と問はれて一人の男ハ、腕を組んでエヽ、暫時(石橋)思案。

○美人の体量　よく小説家なんぞが美人を形容して、腰ハ細々として風に揉るゝ糸柳の如し、なかと云ふが、そんなに輕いものかネ。「さうさ美人百目(薄命)と云ふもの。

○袈裟　渡邊の細君が遠藤武者に殺されたのハ何時頃だネ。「ありやラ今朝。(袈裟)

○金財布　田舎漢が萬世橋の側にキヨロ〳〵して居るを、職人らしき男が見て、「モシ〳〵貴公さん何か遺しなすッたか。「ハア私ハ金を財布に入れたまゝ遺してねへ。「チヤ〳〵金なら上野へ行けば在るヨ。「如何して知れます。「でも金(鐘)ハ上野と云ふだらうぢやアねへか。



○地久節

去る二十八日、華族女學校にては、皇后陛下の御誕辰奉祝の爲め、一同參集して御眞影を拜し奉り、祝辭、唱歌奏樂等も之有たり。畢ッて生徒一同へ茶菓の饗應ありしと云ふ。我社にても國旗を揭げ、社員一統業を休んで萬歲を祝し奉れり。

○御食初式

嘗てより青山御所に御養育あらせらるゝ皇女周宮殿下には、去る二十七日御誕生後一百一十日にならせたまひしに就き、同日御食初の御式を擧げさせられたるやに承る。

○願はくは流行ならざれ

世に一種の流行といふものあり、其の勢力や大なり、英雄之を遏めんとするも遏むる能はず、豪傑之を防がんとするも防ぐ能はざるなり。然れども斯かる大勢力ある流行も、暫時にして泡の如く、夢の如く、幽靈の如く、忽ちにして消え去らずといふことなし。蓋し甚だ馬鹿氣たるものなり。今時何人も知らるゝ如く、國文學といふものは頻りに盛を極めたり。是れ實に然らざるべからざるものにして、實に大賀すべきの現象にてこそ。然れども吾人は憂ふ、是れ一種の流行にして止まんかを。顧ふに我が日本人は甚だ忌むべく、厭ふべき性質——倦き易き性質を有せり。故に一種の流行にして終らしむべからざるものを、無殘にも一種の流行とし終はらしむるなり。然りと雖も國文學のみは是非とも斯かる始末に立至らざらしめたきものなり。吾人力微にして才短なりと雖、願くは先輩と與に之を勉めん。

○學者の洪嘆

前項に記せし如く、國文學の大に隆盛を極めたるより、随ッて其の道に熱心なる人々は、否熱心ならざる人々も、古文學書を得るに汲々たれども、如何せん四離八散或は之あるも高價にて購ひかね、諺に所謂猫の鼻さきに鰹節の思ひなきにあらず。　然るに今や博文館より日本文學全書といふ如何にも貴き有益なる書籍を、極めて、廉價にて出版し、飢渇者の望を満たさしむるは、まことに最上なき功德にて凡ての人々に取り、又博士、學士、學生等の輕便なる參考書ともなるべく、甚だ尊とき賜物なるべしとは、何人も考ふる所にぞある。　所謂和學者なるものゝ喜びは嘸かしと思ひの外、此頃社員の一人は、或る和學者先生を訪ひたるに、先生洪嘆して曰く、國文學の隆盛も一の流行にして止まんかと。　社員其の故を問ふ。　先生曰く、日本文學全書の如き書籍出版せらるればなりと。　社員更に又其の故を問ふ。　先生曰く、日本文學全書の出版は、成程功德も大なるべし、

諸人の喜びも無理ならず、然れども此の書は解釋は甚だ少く、活字の誤植は極めて多し、初學者には誠に不親切なりと謂ふべし。　斯かる書にて勉强しては、所謂似而非學者のみ出で來り、爲めに見るべきなきの文學の現はるゝ如きことあらば誠に嘆かはしき事ならずやと。　是れ實に一理ある話なれば購ひたる諸人は、願はくは少しく此所に心を留められよ。

○娼妓の出樓

此の頃娼妓の續々出樓するは、本人の爲め誠に賀すべき事なり。　而して此の出樓せし娼妓どもは、果して皆正業に服すべきや否や、是れ大に一考を要すべきの事にして、當局者は勿論深く之に注意する所あらざるべからず。　唯自由の身となりたるより、勝手氣儘に社會に翺翔し、糊口に窮するよりして、萬一娼妓にも劣りたるの事をなし、少なからざるの害毒を社會に流布することあらば如何。　否、已に紛に吾人の耳に入り來りたるものあるなり。　吾人は周到

なる注意と、嚴重なる所置とを望んで止まさるなり。

○新 陳 代 謝

新陳代謝の原則は娼妓にまで及ぶものなるにや、出つるものあれば直ちに又入る。 這度北廓にては奇を好む人の心を當て込みてなるべし、琉球婦人を買ひ來りて、娼妓に出だせしと聞く。此の中には必ず寧王女、眞鶴の如き美人もあるべし。爲朝御曹子の如き剛の人々は、八町礫、喜平次等を隨へ鏃を磨ぎて行くなるべきか。 嗚呼哀しむべきかな、憐むべきかな、越鳥の南技を離れ、一葉の舟に送られて遠く此の地に來り、媚を呈し笑を獻じ、朝に南人を送り夕に北客を迎ふる其の心中果して如何なるべき。

○供 養

本年は彰義隊戰死者の二十三回忌に相當するを以て、七月一日を以て之が供養をなす由。 是れいづれ費用のかゝる事ならんが、 吾人の考にては其の講中の人々が今少し費用を出だすことに奮發して、 貧民救助の資にでも當てなば、其の功德も莫大なる事にして、亡者地下の喜も嘸かしと思はるゝなり。供養といひ、紀念碑といひ、嗚呼世何ぞパリサイの人と僞善者と多きや。

○慈 善 會

此の言吾人の常に耳にする所なれども、其の結果は果して如何ばかりの慈善をなせしや、之を聞かざるこそ恨みなれ。 而して重もに新聞紙上に現はるゝは外國婦人の慈善なり、 是れ或は吾人の見聞の足らぬ所なるが故なるまや。 然れども比較的吾が姉妹諸子の慈善の事の少なきは信なるが如し。 吾人は實に慈善なる貴とき文字の有名無實の器械として使用せられざらんことを祈る。

○清 流 女 學 校

愛知縣名古屋なる同校は一昨二十一年十月の創設に係るものなるか、追々に隆盛を致し來り、今日にては教場の數都て五個、 女生徒の數も七十有餘名に達

せり。又其の教員は外國女教師二名、本邦男女教師四名なりしが這度黒川中將の令嬢千春子も日々出校して和文學の教授を擔當せらるゝと云ふ。 去月二十八日には同校生徒一同より皇后陛下の御誕辰を祝し奉るが爲めにとて一篇の祝詞を宮内大臣の許に呈出したりとか。 何卒益々盛大を致し、金鵄尾を張る尾張の城に此の女學校あるを天下に知らしめたきものなり。

○早稻の苗藥

婦人が苗藥にて洗ひ髪を結ぶハ何れの時にか始まりけん、何れの時にか流行しけん、其ハ知らざる所なるが今日の形况にては重に花柳社會、其の他素人の中にても小意氣を競ふ女子の間に行はるゝが如し。今年も最早苗藥は尺餘の長さとなり、都下婦女子の雲鬢に上りしを見侍るなり。

○救助彙報

婦人矯風會慈善部員及び板倉 謙三郎、濱地 八郎の諸氏ハ慈善演説會を催ふしぬ。 横濱フェリス女學校デヨー孃は乙女十八と共に發起して、園遊會を催ふし、殘金一百九十圓を義捐しぬ。 大山伯爵方に寄留するカロックス夫人は三千五百圓を貧民の食物の爲に給與しぬ。 麹町區の末吉忠晴、土田安五郎の二氏は、白米廉賣の事を企てぬ。 横濱婦人慈善會員は、益〻救助に運動する由聞けり。 何禮之氏は病氣全快を祝せんが爲に米若干を施與せしとか。 府下各女學校に於ては目下夫々に集金中の由。 日本新聞社にては義捐金を募集し、大に救助の擧あらんとすると聞けり。 山形縣西里村には向ふ五ヶ月間貧民を救助するの方法を設けたり。 大阪の東西南北の四區長は大に協議を遂げ或は施與し或は廉賣する見込なり。 神戸にてハ貧民救濟義會なるものを組織し、廣く同志者の入會を望み居る由。 神田區の松尾久兵衛氏は貧民救助の爲め大相撲を興行し揚り代は悉く救助費に當つる筈なりと。 麻布飯倉の耶蘇

救堂にては米麥を施與すると云ふ。

○朝鮮國大王大妃崩御

同大妃には本月四日崩御あらせ給ひしよし。大妃御齢八十三歳、尊稱を孝祐献聖宣敬正仁慈惠弘德淵祥大王大妃と號し奉りしが、去月上旬より御危篤に渉らせ給ひ、遂に回春の効なかりしと云ふ。

質疑

○大阪ふ、つ、樣へ。　近頃澤山出來たる東京案內樣の書類の中、如何なる書物が最も宜しきかと問はれたれども、遠慮なくいへば皆殆んど一夜作りのものらしく、これ〱が可なりと斷言は致しがたし。　されど磯江潤著、本鄕六丁目哲學書院發行、定價金五十錢なる「東京市中案內大全」などは其の中にて宜しき方ならんか。　又價の廉なるものにては、芝區櫻田本鄕町金鱗堂發行、「新編東京獨案內」および神田區明神阪嵩書閣の發行にかゝる「東京獨案內圖會」などまづ〱宜しからんか。　本鄕區元富士町二番地盛春堂にては、前者は金八錢、後者は金十七錢にて賣捌くといふ。

○安房、耽古生さまへ。　古代の婚姻行列の儀式は如何と二度まで問はれたれども、斯かる漠然たる問題にては甚だ答ふるに不都合なり。　何となれば古代といふ二字の意味は廣し、何年前とか、何天皇の時代とか、若しくは何天皇より何天皇までの間とか、問題と改められたし。　成程古代といふ廣き範圍內にても、答へがたしといふにはあらねども、斯くするには何回此の質義欄內を埋むるも、到底書き盡し得べきにあらず。　否何冊此の雜誌全面をつぶすも、亦記し盡し得ざるを如何せん。

○志摩、志紀主計さまへ。　秋洲子嫁に食すな、とい

ふ事は文明之毋第三號雜錄欄内に精しく出てあり。就いて見るべし。

○常陸、二峰生さまへ。　內田遠湖先生は詩一首、文一篇と何程の謝禮にて黜削せらるゝことなるや、吾人も之を知らず。　併し極めて薄禮を以て極めて丁寧に黜削せらるゝことは、實に隱れなき事なり。　若し直接に先生の方へ言ひにくければ、本社にて媒介周旋することに致しても宜しきなり。

○志摩、B、Kさまへ。　少年雜誌にては矢張東京府下北豐島郡上駒込村少年園より發行する少年園と、神田區駿河臺西紅梅町十三番地張弛館より發行する少年文武、最も宜しかるべし。　如何に紙數多く、如何に定價廉なるも、記載の種目價値なきものは又何かせん。

質義受持記者謹んで謝す。　記者嘗てより流行のインフルエンザに掛り、已に前號には掲載するを得ず、且つ寄送せられたる原稿と失ひ尊名を忘れたるなどあり。　其の罪如何にも大なるに相違なし、されど病氣ばかりは例外なる事と、切に御宥恕を給らんとを祈る。

寄書

蝶の詞

山田稻子

らうたくも見ゆる小てふの一つがひよ、雄はみどりに黒白きまだら文の羽袖をよそほひ、ひげ長うしてをゝしげなり。　めもれなじみとりの羽袖ながら、白のこまやかなる文のみありて、そのさまたをやかなるが、春の日のどかにさきこぼれたる花のうへをれのがねぐらとして、明ればともに羽袖をふりかはして、いとむつましげに野べにをかべにあそびたはむれつゝ、つかるれば花どものうへにしばしやすらひては、またかたみにあなたこなたへ飛びめぐるもれから、猶れなじ花のうへにかへり來て、ひねもすむ

つびあふめる、そのこゝろいかばかりたのしかるらん。 あならうたき いもせのちぎりかなとばかり見やられて、

花ぞのを、つばさならべて、飛てふの、
こゝろよいかに、たのしかるらん。

卯花初開

咲そめし、うつぎ墻ねは、はつ雪の、
からしほどの、こゝち社すれ。

待時鳥空明

郭公、一聲だにも、きかぬまゝ、
しらみはてたる、夏の夜半哉。

○春郊の轉寐

安乃津　涼　致　生

いとし土筆やあどけなき、
すみれの花をふみみだし、
こちかせ匂ふ木の間をば、
獨りあくがれゆかりなく、
あそぶ蝴蝶や鳥のまひ、
れもしろ嬉しくみわたせば、
遠山ざとの春めきて、
かすみひきたるゆかしさよ、
あゝこの世のパラダイス、
刹となかむれば日はいつか、
山の端こえてあとくらし。

水邊柳

安乃津　花田涼致

玉柳、夫みんために、よそはなり、
きよきすがたを、水にうつして。

初戀

人みんを、うら恥づかしと、よそにみて、
れはひし袖に、戀はありけり。

五月廿五日の夜、雨ふりてけれは

小雨ふる、けふまでめでし、ばらのはな、

あへなくちらん、枝てそれしけれ。

○大竹忠太郎氏にまで御注告

安乃津　悲　呼　生

氏の名は文明之毋廿一號以來、毎號その誌上に出ないヿい有りません。　批評の欄よはいつも〳〵氏の批評が載ッてゐまして、恰ど國民之友に忍月居士の批評を見る樣です。　さア玆で大竹氏に物申すヿが有ります、氏の批評は洵につまらん、よむにたらんヿです。　まづ大竹氏の批評を讀ンで御覧なさい、いやさ讀ンだ御方は御存知でしようが、氏の批評は萬(?)篇一律とか何とか申すので、幾篇見ましても批評の仕方が些しも變はらんで――が決して咎めはしません――ほんに〳〵つまらん小言ばかり！　表帋が何うとか躰裁が何うとか、たゞうはべのヿばかりを彼れ是れいふに文章の半分、乃至過半はそきがために塞がれて、肝腎の本文、眞髓といふ、うちつらの評といひましたら、まア皆無で、ほンの藝妓の言葉にふさわしからぬとか老人の言葉には似あはんとか、細少な――とさげすむでは有りませんが、まだ〳〵是より肝腎な處が有りますから――處に目とつけて批評の眼目と忘れていられるヿです。　これぞ自分が大竹氏に對して、第一の注告です。　第二は文章です、氏の文章は洵に淡泊――ならば宜しいが――無味なので、諷誡もなく面白くもなく、かつて小文學に出た栅草帋評判や、殘菊評判、そして露子姬、花の命、京鹿子杯の評判記によく似ています。　氏の評語はこれら評判記を合併折衷した樣で、殊にれかしく思ふは此等評判記にある句調とれなじ句調が、氏の評語の中にあるヿです。　で自分の望みは今些し諷誡を入れて、そしてれ道化文句い成る丈省いて、眞成に書かれたいヿです。　以上で自分の望みは足りましたが、つまり讀者の益よたつ樣、作者の益にたつ樣御注意して貰いたいヿです。　あれでは些ッとも讀者の益にもたゝず、作者の益にもたちませんから。

亭に鳥とれ頼み申したいとが有ります、そは氏が紅懷帋の評判よトラゲヂーと申されましたが、自分如き文盲漢には、はなはだわかり兼ねますから、以來は日本語に書きかえられたいものです。 ゑかし傍訓になさるのは洵に有りがたいとです。

追記、是れは題外のとですが、文明之母廿五號寄書欄裡に「文明之母記者へ」とて秋香女史の述べられし御説、自分もいたく同意です。 自分も秋香女史同様、ひとへに文明之母記者様よ御歎願まうします。

○勞力者ニ於ケル体力ト智識

志摩英愚　志紀主計抄譯

体力ト智識トハ勞力者ノ有スヘキ最モ貴重ナル性質ナリトス。國ニヨリテ勞力者ノ体力ニ差異アレトモ、ソノ原因ノ何レニ存スルヤハ、今玆ニ論究スヘキ限リニアラサルヲ以テ、姑ラク之ヲ措キ、假令ハ愛蘭ノ勞力者ハ英國ノ勞力者ノ如ク、持久ノ耐忍ト敢爲ノ勇氣トヲ有セスサーブラッセー氏ハ、ソノ著「勞働及債金論」ニ於テ各國勞力者ノ勞働ニ於ケル性質好惡ヲ列擧シタリキ、而メ氏ハ英人ヲ以テ最良ノ勞力者トシ、英國勞力者ノ賃金ハ、ソノ貴高ナル他ニ其比ヲ見スト雖モ、英國ニ於ケル架橋、鉄道、敷設、其他萬般ノ土木工事ハ、之ヲ他ノ歐米諸國ニ比シテ、却テ少額ノ費用ヲ要スルヿヲ論セリ。

従來勞力者ハ甚タ不完全ノ敎育ヲ受ケ居タルヿナレ𪜈、勞力者ノ智識ハ經濟上非常ノ利益ヲ有スルモノニシテ、現今ニ於テハ頗ニ勞力者、敎育ノ必要ヲ見ルニ至レリ。 蓋シ其事業ノ如何ニ係ハラス、一切ノ工事ハ之ヲ無敎育ノ勞力者ニ委センヨリモ、敎育アル勞力者ヲ使用スルノ遙カニ勝レルアルモノニシテ、農業ノ如キハ尤モ熟練、則チ智識ヲ要セザルモノト斷定セラレタルモノナレトモ、經驗アル英國ノ土地差配人ノ説ニヨル時ハ、蘇國ノ地代ノ之ト其豊肥ヲ同クスル英國ノ地代ニ勝ル所以ノ者ハ、蘇格蘭農

業者及ヒ耕作人ノ敎育ノ程度、遙ニ英國農業者及ヒ耕作人ノ上ニアラルヲ以テナリトイフ。又有名ナル大地主ニシテ、兼ネテ實際ノ農業家タル、アイルスベリー伯ガ一千八百七拾四年ソノ借地人ニナシタル演説ニヨレハ、田地ノ耕作最モ行屆キタル地方ハ、則チ勞力者ノ賃金最モ高キトコロニシテ、賃金高キ勞力者ハ、又相應ノ敎育ト、相應ノ熟練トヲ有スルトイヘリ。サレハ一國ノ勞力者ヲ擧ケテ盡ク適當ノ敎育ヲ得セシメタランニハ、恰モ土地自然ノ豊肥ヲ進メタルト同シク、幾多ノ生產力ヲ土地ニ加フルヤ論ヲ俟タサルナリ。敎育ノ益ハ是ノミニ止ラス、敎育ハ又勞力者ノ道德ヲ增スモノナリ。今勞力者ニシテ不誠實ナリトセンカ、盜偸ノタメニ消失スル富ノ幾何ナルヤヲ知ラサル程ナリ。而シテ若シ勞力者ニシテ誠實信ヲ置クニ足ラハ、之カ監督者ヲ設ケテ見廻リヲナスヲ要セス、監督者ヲ置クノ必要ナケレハ、勞力者ノ勞力ハ其ノ生產力ヲ增シタリトイフベシ。何ントナレハ若シ監督人ヲ置カサル能ハサルノ場合ニ於テ、勢ヒ富ノ幾分ヲ割イテ監督人ノ給料ニ差向ケザルベカラサルヲ以テナリ。タトヘハ勞力者ニ拾名ニ付キ一人ノ監督ヲ設クルトセハ、此監督ハ必ス尋常勞力二倍以上ノ給料ヲ得ルヲ以テ、勞力者ノ勞力ハ、則チソノ拾分ノ一ハ、生產力ニ失ヒツヽアルニ齊シキ譯ナリ。サレハ監督者ヲ置クノ必要ナシトセハ、勞力者ハ充分ニソノ勞力ヲ應用スルヲ得テ、一方ニハ必ス製出物件ノ代價ヲ廉ナラシムベシ。然ラスンバ必ス他ノ一方ニ於テ、勞力者ノ賃金ニ上騰ヲ來スヤ疑ヲ容レサルナリ。勞力ノ生產力ハ又勞力者ノ他ノ性質好嫌ニヨリテ、種々ノ差異アルモノニシテ、飲酒ヲナスモノハ禁酒家ト同等ノ生產力ヲ有セサルノミナラス其職ニ於ケル不規則ニシテ亂雜ナルヲ免レス。

社告

凡ての事業必らず暑中休業あり雑誌事業豈に之れなきの道理あらんや本社は卒先して之れを行はんとす乃ち本號にて暑中休業となすべし讀者之を諒せられよ

明治二十三年六月

生文社員一同

民法及商法釋義發刊ノ趣旨幷豫約方法

大審院　撿　事
法律取調報告委員
明治法律學校
東京專門學校　講師
日本法律學校

本書
ハ廿三年五月廿三日第壹號發兌——全部紙數大凡三千四百頁
ハ毎月（十日 十三日）二回必ス刊行——壹册紙數二百廿頁餘
◎毎編正價金四拾錢外ニ遞送費金二錢
ハ八ヶ月間則チ十二月廿三日完成——全部拾六册金五圓八十錢
ハ紙質ノ善良ナルヲ撰ヒ且印刷ヲ鮮明ニシ誤謬ナキヲ旨トス

日本　法律學士
佛蘭西法律學士　從五位　磯部四郎先生著

大日本新典　民法釋義

全十六册

豫約法

○豫約價壹册金三十五錢
○全四册前金壹圓三拾六錢（八册前金貳圓六拾錢）（十六册前金五圓）
○右ノ外壹册ニ付遞送費金二錢ヲ要ス
○全卷十册以上前金御注文ニ候ハヾ遞送費ハ弊舗ニ於テ支辨スヘシ
○豫約申込ノ節ハ必ス送金アルヘシ
○郵便爲換ニテ御送金ノ節ハ必ス證書ニ（東京本局）又ハ（武藏鴻巣）ト記入アルヘシ
○郵券代用壹割増ノ𠃍

○豫約期限ハ來ル十一月二十日迄トス　但シ期限後ハ必ス正價ニ復スヘシ

民法トハ各人相互ノ權利義務ヲ規定シタルモノナリ故ニ此交渉頻繁ナル社會ニ安息セントスル者ハ少ナクモ其大体ニ通セスシテ可ナランヤ蓋シ該新典タル我國古來ノ慣習及ヒ歐洲諸國善法中ノ粹ヲ抜キ別ニ一体ヲ成セル者ニシテ四編合計正文凡壹千三百十九條アリ

全先生著

大日本新典 商法釋義

全十册

○廿三年五月十五日第一號發刊
○毎月（十五日）（廿八日）二回刊行シ九月廿八日完成
○全部（十卷）紙數大凡二千七百頁（一册二百七十頁餘）
○正價一册金五十錢外ニ遞送費一册ニ付金二錢
○全部（拾册）金四圓五十錢外ニ遞送費金二十錢

豫約廉價

（〇）

壹册前金四拾五錢（五册分前金貳圓拾五錢（十册分前金四圓）右ノ外遞送費一册ニ付金二錢ツヽヲ要ス
全卷十册以上前金御注文ニ候ハヽ遞送費ハ弊舖自辨ノ事豫約期限八月廿日迄（以下民法ノ例ニ倣フ）

商事ハ民事ノ一部ニ外ナラス然シテ商事ニ在リテハ特ニ迅速信實安全ヲ貴フ是レ民法アルニ拘ラス更ニ商法特別ノ規定ヲ要スル所以ナリトス我國固ヨリ商事ノ慣例略々備ラサルニアラスト雖ヒ只其不規則タルヲ免レス故ニ此新法ノ公布ハ商業社會ノ秩序ヲ一新スルモノト謂フヘシ正文凡壹千零六十四條アリ

右二大法典タル實ニ汎ク法律學ニ達スル者ニアラサルヨリハ其意義ヲ表白スルコ能ハサルナリ弊堂是ニ見ルアリ切ニ磯部四郎先生ニ乞ヒ詳細之カ註釋ヲ施シ適宜册ヲ分チテ漸次刊行セントス抑々先生ハ明治八年官命ニ依リ佛國巴里府ニ遊ヒ留學六年歸朝以來專ラ法典編纂ノ事務ニ鞅掌セラレシモ公退ノ暇著書頗ル多ク其學識ノ深遠文章ノ緻密世夙ニ定評ノアルアリ且民法商法ノ蘊奧ヲ討究セラレシコ人ノ能ク識ル所ナレハ此書ノ善良ナル多言ヲ竢タスシテ明カナリ又世間普通ノ註釋或ハ名家貴顯ノ題字序文等ヲ掲ケシ投機者ノ一夜作ニ成リタルモノヽ比ニアラス江湖ノ人士先ッ第一卷ヲ得テ此廣告ノ誣言ニ非サルヲ知リ賜ハンコヲ希望ス

◎兩書ハ遞信省認可ナルヲ以テ遞送費ノ廉ノミナラス極メテ迅速ニ到達スヘシ

發行所（東京市日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地　文昌堂　長嶋恭三郎
（埼玉縣北足立郡鴻巣町百十四番地　盛化堂　長嶋爲一郎

大審院檢事
法律取調報告委員
日本法律學士
佛蘭西法律學士　從五位
明治法律學校
東京專門學校講師
日本法律學校

磯部四郎先生著

憲法講義　全一册

洋綴總クロース金文字入美製本紙數
六百五十頁余實價金九拾錢　郵稅金
三拾六錢

附　議院法。衆議院議員選擧法。會計法及貴族院令講義
皇室典範。皇族列次及衆議院議員選擧法　附錄

右ハ實力ト經驗トヲ以テ法律社會ニ名聲赫々タル磯部四郎先生ノ講義セラレタルモノニシテ解釋ノ確正當ナル文章ノ平易流暢ナル遠ク他書ノ及バサル所ナリ當時憲法ノ註釋或ハ正解等ノ名ヲ以テ梓ニ上ルモノ其數幾十種ナルヲ知ラズ然レ𪜈投機者ノ一夜作ニナリタルモノニシテ實ニ見ルニ忍ビザルモノ多ク只徒ラニ文章上ニノミ拘泥シテ毫モ深意ノ存スル所ニ着目セズ亦國家ノ基本タル大憲法ヲ謬ラシム此書ヤ前書ノ比ニアラズ憲法ノ正條ヨリ議院法衆議院議員選擧法會計法及貴族院令ノ各條ニ付キ確實正當ナル解釋ヲ下シ且ツ重大ノ問題ニ關シテハ一々各國憲法ヲ參照セシモノナリ此書ヲ繙キテ初テ憲法ノ深意ノアル所ヲ知ルヲ得ベシ殊ニ帝國議會ノ最モ主要ノ問題タル會計法ノ如キハ却テ他書ノ忽ニセシ所ナリト雖此書ハ務メテ綿密ニ解釋ヲ下セシモノナリ此書ヲ繙クモノ宜シク注意シテ此廣告ノ誣言ニ非ルヲ知リ賜ハンヿヲ希望ス

樞密院議長從二位勳一等伯爵大木喬任公題字

法制局參事官兼法律取調報告委員正六位本尾敬三郎先生叙

日本法律學士佛國法律學士司法省參事官兼法律取調報告委員從六位岸本辰雄先生叙

日本法律學士臨時帝國議會事務局書記官正七位矢代操先生叙

日本商法實用

全二冊

正價金九十錢

明治法律學校々友
淺間新五郎君
小野崎吾助君 合著

本書ハ專ラ商人間ノ實用ヲ趣旨トシ務メテ平易ノ文字ヲ用ヒ簡明ニ其意義ヲ說キ商人間ニ尤モ必要ナル商號ノ登記及ビ商人ノ義務トシテ所持スヘキ帳簿ノ種類幷ニ其義務トシテ記入スヘキ事柄及記入ニ關スル注意等ヲ一々列記シタルノミナラス會社法及ビ爲替法、仲買人規則ヲモ明瞭ニ解釋シタルモノナレハ商業家ノ爲メニハ行路ノ指南商海ノ標識トモ稱スヘキモノニシテ紳商諸君ハ勿論手代小僧ニ至ル迄通讀セサルヘカラサル要書ナリ乞フ諸君速カニ購讀シテ明年實施ノ準備ヲ怠ル勿レ

本書ハ六月初旬發賣仕候

明治廿三年五月

發行所

東京市日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地 文昌堂 長島恭三郎

埼玉縣北足立郡鴻巣町百十四番地 盛化堂 長島爲一郎

本社の事業を贊成し、原稿を寄することを約諾せられたる諸君は左の如し。

法律學士 磯部四郎君
文學士 井上圓了君
皇典講究所講師 畠山健君
醫學士 小川三之助君
高等中學校敎諭 落合直文君
岡本武雄君
渡邊修二郎君
田中登作君
棚橋絢子君
中村秋香君
成立學舍講師 中川重麗君

哲學館講師 內田周平君
山縣悌三郎君
文學博士 小中村清矩君
文學士 國府寺新作君
高等中學校敎諭 小中村義象君
佐々木弘綱君
島地默雷君
農學士 志賀重昂君
醫學士 關場不二彦君
須藤南翠君

（姓名イロハ順）

小生儀御蔭様にて病氣の追々快癒するに隨ひ無聊に堪え兼ぬるより時々散歩の爲め病室に在らざること尠なからず此際御見舞下されたる諸君にして往々芳名を識り難きことあり謹んで爰に欠敬を謝す又此後御見舞下さるゝ仁は前日より「何時頃に行くべし」と豫め御報あらんことを望む

帝國大學第一醫院内科四號室ニ於テ

大矢森之助

海軍々醫少監矢野義徹閲
海軍々醫補富松郁三郎著

通俗飲酒効害論　完

定價金十五錢割引賣價
郵税共金八錢（郵劵代用不苦）

此の書は丁寧親切に學術上より實際上より飲酒の効害を説きたるものなれば苟も長壽を得んとする諸君は御購讀を乞ふ

賣捌所　盛春堂

東京本郷元富士町二番地

前號目次(大附錄付)

附録に掲げたる、松平樂翁公の酒の戒は、未だ世に公けにならざる文字にして、其の妙はいふべからざるものあり。

小説 江戸紫 雜誌

毎月五日廿日發刊
一册價金三錢
郵税共金三錢二厘

●紅葉山人主筆●

初號發兌
六月二十日

半ヶ年分前金 三拾錢
一ヶ年分 金五拾八錢

●初號目次●

發行所 東京牛込北町四十一番地 硯友社

明治二十三年六月十八日印刷出版

（東京市神田區柳原河岸錦花堂印刷）